

看護部門年報の発刊にあたって

当法人は、皆さんの医療、看護に対する責任感と熱意により、概ね事業計画に沿った運営ができていることに感謝いたします。

高度で質の高い医療を提供するうえで、看護の果たす役割は大変重要であり、その役割を担う人材の育成が不可欠で、各看護部等においては、研修をはじめとする様々な活動をされていると思います。

機構を構成する4病院にはそれぞれの役割があり、必要とされる看護の内容も異なります。また、医療を巡る環境の変化は速く、看護にもそれに対応することが求められています。人材の育成等には不断の取り組みが必要です。

このため、看護部（科）においては、看護の理念や基本方針を明確に示し、目標を定め、共通する看護力の養成をはじめ、そのしっかりとした基盤の上に立って、病院の役割に即した実践力の養成・向上に計画的、かつ、創意工夫を凝らした諸活動が毎年度行われているところです。こうした活動は各看護部（科）において主体的に行われており、この年報は、各看護部（科）において、目標達成のために実践した、研修や教育活動などを記録するものであります。

各年度の成果等については、各看護部長門長のあいさつにある通りであり、その達成状況を適切に評価することを通じ、翌年度の取り組みへと繋げていただければ幸いです。皆さんの持てる能力がいかに発揮されることを期待するものです。

医療をめぐる環境はめまぐるしく変わりますが、当機構における看護部の役割を認識し、しっかりとした目的意識をもって、看護部の在り方等に総括的に対応する看護管理担当との連携、調整を密にした取り組みを期待しております。

最後に、近年、看護師の応募倍率も下がってくる傾向にあります。人材を確保するには、まずその母数を増やす必要があります。その中で、良い人を見つけるのは面接官の力量ですが。そのためには、当機構4病院がやりがいのある働きやすい環境との認識を広めることが必要です。厳しい中にも働きやすい職場環境が作れるよう、皆さんと一緒に努力していきましょう。



理事長 竹内 功

令和5年度を振り返って

今年度は、COVID-19が5類へ移行し Beyond COVID-19に向けた取り組みが進められる中、広島市民病院看護部は2つの目標を挙げました。

目標の1つ目は、看護職の責務を担い、生活と保健医療をつなぐ質の高い看護を提供する。目標の2つ目は、看護補助者との協働を推進しお互いを認め合い働きやすい職場環境を作るです。

1つ目の目標については、院内教育だけでなく県看護協会主催の訪問看護出向事業、訪問看護交流事業、助産師出向事業等へ参加することで、現場実践を通し生活者として支援する視点を強化することができました。参加した看護師が先頭となり急性期病院看護師の在宅を見据えた支援に対する意識の向上と、現任教育をより充実させていく予定で、今後も引き続き保健医療介護連携に努めて参ります。



2つ目の目標については、院内全職員を対象にした多職種連携職場風土調査を実施しました。その結果、看護部に在籍する看護補助業務員や保育士、事務員は連携意識が高いことが分かりました。働きやすい職場環境作りには、看護部の理念であるお互いを思いやることのできる組織風土の醸成が必須です。近年、看護補助業務の人材確保のためアウトソーシングが進む中、広島市民病院看護部では、自施設で看護補助業務員を育成することへ重点をおき、働き続けることができる職場環境を目指し取り組みました。その結果、看護補助業務員の離職率は大幅に低下し維持することができました。この結果を維持できるよう看護補助業務員をはじめ、保育士、事務員と協働して参ります。

また、5月にはG7広島サミットが開催されたことで、複合的危機に対する連携意識が高まりました。テロやサイバー攻撃対応だけでなく、自然災害へ迅速に対応し病院機能を維持することの重要性を感じる機会となりました。

令和6年7月には、休止しているコロナ病棟が一般病棟として再開する予定です。この機会に看護部の働き方改革や効率的な病床運用への取り組みを進め病院経営に参画することで、地域の中核病院としての役割を果たし貢献できるよう努めて参ります。

今後ともどうぞご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

広島市立広島市民病院
副院長（事）看護部長 長谷川 聡子

令和 5 年度を振り返って

移転後 1 年が経ち、その間さまざまな状況に対して協力しながら変化に対応してきました。北部医療センター安佐市民病院は、地域完結型の医療を提供するため、高度急性期医療の提供をしていくことと、その後の生活の場を見据えて地域との連携を強化していくことを役割として、看護は生活の質を考え、「生活者としての患者」を「治療」と「生活」の側面から支援を行うことが大切と考え患者さんに看護を提供してきました。



看護部では『変化に適応し、共に成長しあえる看護部組織』を目標に、ひとりではなく、共に成長できるように共に学びあい、共有し、共感しながら看護を考え、実践することそして、患者さんだけでなくひとり一人の看護職が共に支えあうことが大切だと思います。

令和 5 年度は「病棟再編に対する看護提供体制の構築」「入退院支援体制の構築」「外来看護体制」と、3つのプロジェクト「病床管理」「看護提供体制」「外来看護」に取り組みました。

移転後 1 年経過し、経験したことから、徐々に適応でき、安定した環境にしていきたいという思いもあり、これまで実践してきたことを定着できるようにしていく事が重要と思いました。

病棟再編では、新型コロナウイルス受け入れ病棟が、10 月から病床機能を変えて、救急患者の受け入れ病棟として新たにスタートしました。様々な部署からスタッフが異動し新たな人間関係を構築しながら病棟機能に適応し、安全で質の高い看護ケアが提供できる体制にスタッフみんなで取り組んでいきました。

また、働きやすい環境をつくるため、夕方の看護補助者の導入や、夜勤看護師専用ユニフォームの導入を行いました。

病棟再編、COVID-19 対応、想定以上の入院患者さんの受入れ、看護体制の変化等多くの課題に直面しながら、令和 5 年度を乗り越えることができたことを思うと、とても感慨深いです。

すべては、スタッフの皆さんがさまざまな変化に適応できる順応力の高さと、看護専門職としての責任感と、看護実践力そしてチームを形成し協働する人間力の高さであると思います。そして、相手に対する優しさだと思います。とても感謝しています。

これからも、看護師が看護に専念できるような働きやすい環境と、看護のやりがいを感じることができる環境、そしてそれぞれの生活を大切にできる職場づくりになるように今後も励んでいきたいと思っています。

広島市立北部医療センター安佐市民病院
副院長（事）看護部長
松原 朱美

令和 5 年度を振り返って

当院は令和 2 年からは COVID-19 との戦いでした。第二種感染症指定医療機関としての使命で全職員の協力の下、病院内でクラスターが発生することなく対応できました。本当にスタッフには感謝しかありません。地域住民の方たちの応援も励みとなりました。今後も地域住民の方たちの支えとなれる病院を目指していきます。

看護科は「看護を必要とする人に、安全な環境と安心できる看護を提供します」を理念にしています。この理念を実現するために、患者さん一人一人に寄り添い、今何が必要なのかを常に考えて行動できる自律した看護師の育成を目指しています。そのため、患者さんやそのご家族の目線からの看護を実践できるよう、看護師自身が日々研鑽していける環境調整をしていきたいと考えています。



看護科では令和 5 年度は 2 つの目標をあげました。1 つ目は「共育～共に育とう、育てよう～」です。思いやりを持ちながら切磋琢磨してお互いが共に成長できる環境整備を進めました。環境整備の 1 つとして各部署がストレスに感じていることを分析し、業務改善に取り組みました。例えば、外科病棟では手術の関係で休憩時間の確保が難しかったため、業務改善に取り組み休憩時間の確保に努めました。外来では小児救急医療拠点病院として救急外来の質向上のために急変時の症例の振り返りを医師と共にシミュレーションにて振り返り、外来の質向上に努めています。このように各部署がそれぞれ取り組みを行い、業務がしやすくなり、多職種で相談しやすい体制にもなってきたように思います。

2 つ目の目標は「After コロナを見据えた健全な病院経営に参画する」です。これは同じ機構内の病院である広島市民病院との「一つの病院群としての病院運営」の推進です。お互いの特長を活かしながら WIN—WIN の連携強化をしていく取り組みです。病床利用部会・化学療法部会・外科部会の 3 部会で話し合いを行いながらスムーズに連携できるように多職種で頑張っています。

今後も良心と信念のもと信頼される医療を目指し、患者さんに「舟入市民病院に入院してよかった」と思ってもらえるようにスタッフ一丸となって頑張ってまいります。

広島市立舟入市民病院
総看護師長 青木 美江

令和 5 年度を振り返って

少子高齢化や人口減少などを見据え、医療や介護、障害や福祉サービスといった地域の特性に合わせた社会システムの構築が求められており、リハビリに対するニーズはますます高まる傾向にあります。

令和 5 年度 看護科は『リハビリテーション専門病院として、確かな知識・技術のもと、患者中心のチーム医療の提供ができるように、成長し続ける組織を目指す』ことを目標に掲げ、取り組んだことを 3 つあげてみます。



まず 1 つ目は「業務改革」をキーワードに時間外削減に取り組みました。時間外の要因の多くを占めていた看護記録の見直しを行い、事象場面に沿った看護記録のテンプレート化をすすめることで看護記録の時間短縮につなげることができました。令和 4 年度の時間外勤務数と比較すると 1,266 時間 29.9%の時間外短縮の達成ができました。今まで記録に費やしていた時間を、ベッドサイドのケアの時間に移行することができるようになり、リハビリテーション看護の基本である、患者さんの想いに寄り添い、共に支える看護の実践に向け、取り組みを強化していきたいと考えています。

2 つ目は、看護師、介護士の育成です。看護師キャリアラダー取得率向上に加え、今年度は介護士ラダーを構築しました。多職種チームの一員である介護士の質の向上に向けて取り組み、研修と自己研鑽を重ねながら、介護士 18 名が介護士ラダー I の取得ができました。

3 つ目は、「質の高いリハビリテーション看護」を様々な人にアピールすることを目的に看護科インスタグラムを開設しました。日頃、病棟で実施している病棟リハビリの内容や季節の行事、看護科研修の動画などをインスタグラムにアップすることで、紹介率向上やリハビリテーション看護の楽しさ、やりがいを知ってもらうきっかけにはなっていると感じています。

新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行されましたが、感染力は依然変わりなくクラスターも何度か経験しましたが、その経験を力にかえて乗り越えることができました。引き続き、感染対策に留意しながら、看護・ケアの充実をはかることができるように職場環境の整備を行っていきます。

職員に心からの笑顔がないと、心に響く看護はできません。専門職として長く働き続けられるよう、仕事とワーク・ライフ・バランスを視野においた働きやすい環境づくりに向け、引き続き努力していきます。

広島市立リハビリテーション病院
総看護師長 奥田 加世